

銚田市まちづくり
推進会議広報

IPPO

～ 一歩 ～



2023年6月12日発行

第20号

巻頭写真： カムムリカイツブリの雛誕生、4年ぶり繁殖

北浦北部のカムムリカイツブリは、2018年の3羽を最後に、繁殖が見られていませんでした。2020年に1羽孵化しましたが成鳥まで育たず心配していたところ、昨年2022年に3羽の雛が誕生し、元気に泳ぎまわる姿を見せてくれました。少なくとも2羽は成鳥まで育ち、銚田を象徴する希少種の繁殖が継続したことに胸を撫でおろしました。

(撮影 2022年7月10日 於巴川河口)

嗚呼！ 30 年前

日本の歴史的転換点

野村正満

30 年前の私

若かった。まだ 40 代半ばで仕事でもバリバリの現役でした。子育ては残っていたものの、それも含めて未来への期待と希望もまだあって、30 年前の私はそれなりに充実した日々を過ごしていたような気がします。

太平洋戦争が終わって間もなく生まれた私たちは団塊の世代とか、第一次ベビーブーム世代とか、全共闘世代とも呼ばれますが、どれも同じ私たちの世代を意味しています。生まれたときはお産婆さんによる出産だったそうです。産婦人科医による出産が主流となったのは 10 年以上後になってからのようです。小さいころはまだ敗戦の名残があって貧しかった印象が強く残っています。食べるものも私の育った東京では潤沢ではなく、小学校では栄養不足を補うための不味い給食がありました。はなたれ小僧ということばがあります（ました）が、子どもたちはみんな鼻水を垂らしていました。衛生状態が悪かったのでしょう。

どん底から頂点へ

その一方で、朝鮮（戦争）特需もあって神武景気に岩戸景気と好景気が続いて、日本経済は高度成長期へと突入しました。それを象徴する東京オリンピックや東海道新幹線開通といった出来事は私が高校生のころでした。その後、あまりの成長速度に世界は驚き、国内総生産=GDP はあっという間にアメリカに次ぐ世界第 2 位となりました。日本バッシングなど海外からの抵抗をもものともせず、右肩上がりの成長は留まるところを知りませんでした。食べることに不自由したときから 30 年ほどで今度は飽食の時代に突入しました。飽きる

ほど十分に食べるという変化です。生活は断然豊かになり、同じようなモノを買うときも安いモノは信用できないと、あえて値段が高い方を選んで買う、などという馬鹿なこと平気で行われたバブルの時代が到来しました。

転落

ところが 30 年前、まさに歴史の大転換点がやってきたのです。バブル景気が崩壊して、50 年近く続いてきた経済成長は鈍化でも低成長でもなく、突如横ばいとなりました。給料などは下がりました。それが 30 年もずっと続いています。他方、諸外国はどこも成長を続け、GDP は中国に次ぐ第 3 位に転落しました。インドやドイツにも抜かれて第 5 位になる日も近いという専門家もいます。購買力を示す人口 1 人あたりの GDP では世界 30 位で韓国よりも下になりました。数値的には横ばいなのですが、国際的に他国と比較してみると、日本の持っていた力は低下したと言ったべきなのでしょう。

失われた 30 年

では、この 30 年間で何がどう変わったのでしょうか。明らかに国民の格差が大きくなりました。かつては一億総中産階級などと、そんなに貧富の差もなかった日本国民ですが、収入のいい人と生活が精一杯の人という違いが大きく分かれる状況が顕著になったと感じるのは私だけではないでしょう。企業はいつでも雇用を操作できる派遣など非正規職員で安く労働力を使い、同時に正規職員の給料も長期にわたって押さえて、余ったお金はタンスにしまい込む経営で、増える企業の内部留保も設備投資等に使うこともあまりありません

でした。恐らく経営者にとっては収まらないデフレが怖くて決断ができなかったのかも知れません。

展望と点棒

そうした世の中の仕組みを作ったのは政治です。政治家たちはこの30年間でどう見ているのでしょうか。その仕組みを変えたことがこの低迷につながっているのではないのでしょうか。これでよかった、と言える人はいないと思うのですが「〇〇ノミクスは成功だった」などと平然としている人が大きな顔をしています。過去をきちんと総括してこそ、初めて将来の展望が開けるのではないのでしょうか。麻雀だって点棒がないと負けるのです。

昨年度の第23期ほこた塾では「嗚呼！30年前」をテーマに設定しました。30年前に何があったのか。この30年間で何がどう変わったのか、それとも変わらなかったのか。そこを見つめ直すことで次の時代に備えようという企画です。多くの講師のみなさんから重要な示唆があったと思います。

蛇足

ところで今春、統一地方選挙がありました。統一地方選挙は戦後間もなく始まった4年ごとに4月、全国一斉に県知事と県議会議員、市長と市議会議員を選ぶ選挙ですが、私たちの銚田市ではどれもありませんでしたし、銚田のこれら4つの選挙は時期がいずれもバラバラです。どうしてでしょうか。首長では任期途中で辞任したり解任されたり、議会では解散があったりして選挙時期がずれます。多くの場合、その原因として汚職や不祥事があったことを意味しています。どうやら、銚田市の場合はその要因が30年前ごろにあったという人もいますが、15年前に移住した私には情報もなく、よくわかりません。

ちなみに、首長と議会の選挙は同時に行った方がその地方が抱える問題点や争点が有権者に明らかになるなど、別々にやるよりメリットが多いというのが通説です。それに、選挙を実施する経費も安くなることも明らかですが、これを変えることはまず無理なようです。



著者近影

ほこた塾・塾生募集
第23期テーマ
嗚呼！30年前
注目！この数字をどう考える？

	約30年前	現在
平均年収	452万円	433万円
山梨県内平均	220万円	1000万円
山梨県内最富	190万円	484万円
消費税率	3%	10%
世帯世帯数	122万人	81万人
年間投票者数	9400人	2万2000人

※数値は概数です

ほこた塾・塾生募集要項

開講期間
2022年12月～2023年3月

講座回数
基本講座5回、特別講座2回
※基本講座は原則として、福祉事務所会議室にて平日夜間に、特別講座は週末に開催します。

募集人員
50名、どなたでも塾生になれます(先着順)

入塾費用
資料代等として2000円
※銚田市まちづくり推進会議会費1000円を含みます。
※単独で聴講希望の方は会費500円です。

入塾方法
入塾申込みはスマートフォンでQRコードから、または裏面の申込書にご記入の上、FAXが電話でお願います。

申込締切
2022年12月5日

お問い合わせ
銚田市まちづくり推進課
電話:0291-36-7154
FAX:0291-32-4622
担当:090-8857-9171(田口)

申し込みフォーム

主催/銚田市まちづくり推進会議

詳しい講座内容は裏面に記載されています
今期も多彩な講師陣を迎えます
ぜひ講座内容は裏面を参照してください

「嗚呼！30年前」をテーマとした
第29期ほこた塾のポスター

カエルの楽園 銚田市

藤井 歩

田んぼや林の多い銚田市ではたくさんのカエルに出会うことができます。今回はよく見られる(声が聞こえる)カエルたちを紹介します。皆さんが少しでもカエルに親しみを持ってもらえると嬉しいです。



ニホンアマガエル

ニホンアマガエル 最もよく見るカエルです。吸盤があるので高いところにもいます。繁殖期や雨が降りそうな時にゲツゲツゲツと大きな声で鳴きます。



シュレーゲルアオガエル

シュレーゲルアオガエル 春の水辺でキリリリ、クルルルと鳴きます。ニホンアマガエルと混同されています。たまに木の上で休んでいるのを見かけます。



アズマヒキガエル

アズマヒキガエル 3月頃繁殖のためにあちこちから

池に集まって来ます。後にはヒモ状の卵塊が残されています。クッククックツツとかわいい声で鳴きます。



トウキョウダルマガエル

トウキョウダルマガエル 茶色の個体です。トノサマガエルと混同されていますが、関東ではこの種が生息しています。水の入った田んぼで見られます。



ニホンアカガエル

ニホンアカガエル シュツとしたカッコいいカエルです。2月に池の中の丸い卵塊をたくさん見ますが、カエル自体はたまに林内の地面で見る程度です。



ウシガエル

ウシガエル 食用ガエルです。ヴォーヴォーという鳴き声は聞きますが、滅多に姿を現しません。アメリカ原産の特定外来生物です。親子共に巨大です。

さつまいものはなし

Part 2

飯塚克則

さつまいもの生産高は茨城県が全国2位。1位は鹿児島県ですが、澱粉や焼酎の加工用が主。食べるさつまいもは茨城が一番。

ところで、さつまいもって、いつどこから日本にきたの？ 諸説いろいろありますが、以下のとおりまとめてみました。

1605 琉球人野国総官（ぬぐんそうかん）によって、明（中国福建省）から伝来

3つのルートにより、薩摩（鹿児島県）に伝来されました。

1611 島津家久の琉球出兵により、甘藷（赤いも）を持ち帰った。

1698 種子島久基が琉球より、甘藷（白いも）を取り寄せた。

1705 漁師前田利右衛門が琉球から、甘藷（赤いも）を持ち帰った。

なぜ、甘藷が普及したの？

1732 江戸三大飢饉のひとつ、享保の大飢饉が発生

1734 江戸において、甘藷先生青木昆陽が五穀の不作を補う自給作物（救荒作物）として、甘藷の普及を図り、千葉県にて試験栽培を始めた。

なぜ茨城県ではないの？ どうして？



甘藷先生 青木昆陽

(https://www.wul.waseda.ac.jp/kosho/bunko08/b08_a0249/index.html)

その後、どうなったの？

1789 江戸において、焼き芋屋（十三里）が登場。甘藷は栗（九里）より（四里）うまい十三里だから。

でも見た目がごり（五里）ごり（五里）した十里はおいしくないですね。

1789 大阪において、江戸時代の料理書甘藷百珍が出版される。甘藷料理を123種紹介した料理書。

1870 ついに岩手県でも甘藷栽培が可能に

主食、副食や間食として日本人の食生活に定着したさつまいも。どんどん美味しくなって、たくさん食べていますね。

なお、歌川広重の浮世絵各所江戸百景（びくにはし雪中）にも十三里が登場しています。ご確認下さい。

運営委員会・各部会より

運営委員会

運営委員長 田口裕之

運営委員会では、毎月一回の定例会の開催と三つの部会の連絡調整、広報誌 IPPO の発行を行っています。また昨年度に引き続き、「銚田一高附属中学校第一学年 自然観察&歴史探訪」と題しましてバスツアーを実施しました。

★銚田一高附属中学校第一学年 自然観察&歴史探訪★

2022 年 10 月 14 日、郷土史研究家の渡辺俊夫様、野鳥写真家の川又利彦様を外部講師にお招きし、生徒 40 名、教員 4 名、スタッフ 11 名の参加者のもと、標記のバスツアーを実施しました。

初めは、銚田の自然に関する講義を銚田市環境学習施設「エコ・ハウス」で行い、その後の野鳥観察では、自然環境部会から双眼鏡やフィールドスコープの使い方の指導を受け、生徒たちは一人一人渡された双眼鏡を熱心に覗いていました。

北浦北部の野鳥観察を満喫した後は、銚田の文化遺産を巡ります。最初に完成して間もない銚田市生涯学習館「とくしゅくの杜」にて、展示物や収蔵品を見学しました。ちょうどその日は、銚田陸軍飛行学校企画展が行われており、貴重なお話を聞くことができました。生徒たちが銚田で出土した土器や宝剣等の収蔵物を興味深く見たり、熱心にメモを取ったりする姿が印象的でした。

次に徳宿城址、梶山古墳群、銚田陸軍飛行学校跡（監的、顕彰碑）を見学しました。約 300 年続いた常陸平氏の流れをくむ徳宿氏は、安房、畑田、富田、菅野谷等に一族の支配領域を拡げていきましたが、戦国時代初頭に水戸の江戸氏との徳宿合戦に破れ、滅ぼされてしまうとの話がありました。また、梶山古墳群の見学では、この梶山に有力な豪族がいた証拠である豪華な副葬品が発見された石棺の存在を、鉄の棒で突き「カンカン」と音で確認しました。

時間の関係上、じっくりと見学できず、ちょっと物足りなかったかもしれませんが、今回を足掛かりに、より詳細な探求をされることを期待します。



梶山古墳群で熱心に説明を聞く生徒たち

将来考古学者が生まれるかもしれませんよ。この様子は 10 月 21 日の茨城新聞に掲載されました。

人材育成部会

第 23 期ほこた塾塾長 雑賀美丘

★第 23 期ほこた塾入塾式及び第 1 回基本講座★

2022 年 12 月 12 日

コロナ禍が始まって 3 年、スタッフの熱い思いで中断することなく開催してきましたが、今期も 40 名以上の塾生が集まりました。

入塾式では一人ひとりの呼名を行い、銚田市を代表して安原教育長より祝辞をいただいた後、講座を行いました。



今期の全体のテーマは「嗚呼！30 年前」としましたが、第 1 回基本講座は《30 年前もいいけれど、50 年前は・・・》と題して、まちづくり推進会議の立ち上げからご指導いただいている、県生涯学習・社会教育研究会会長の長谷川幸介氏にお話しいただきました。30 年前の 12 月 12 日の茨城新聞の記事を用いて、当時の世

相や政治情勢などを振り返ったほか、50 年前の話題にも触れ、懐かしくそれぞれの人生を振り返りました。



★第2回基本講座★ 2023 年 1 月 18 日
《この 30 年で日本社会が得たものと失ったもの》

茨城大学副学長の佐川泰弘氏が、バブル経済が崩壊して以降の「失われた 30 年間」について、人口、出生数、GDP、雇用、食料自給率の変化など、様々なデータを用いて講演してくださいました。人口減の社会を想像してエネルギーや食べ物など、生活を守る拠点としての地域のあり方をみんなで考えていくことの重要性が示されました。



☆第 1 回特別講座☆ 2023 年 1 月 29 日
《「温故知新」銚田に住んだ先人から学ぶ歴史の足跡》
と題して、郷土史研究家の渡辺俊夫氏に史跡を案内していただきました。

まず最初に、茨城町に残る勘十郎堀跡を見学。江戸時代、東北地方から江戸までの米などの船での物流

の途中、湊沼から巴川までの陸の部分をパナマ運河方式で堀を作り通そうとする一大事業でした。海難事故が多発する鹿島灘から房総半島沖経由の太平洋ルートを避け、巴川から銚田、北浦を通り、利根川を上って江戸に入るルートの拡充になるとの試みでした。土質の問題や計算ミス等により頓挫してしまいましたが、未だに 10 数メートル掘られた跡は、長い距離を残しています。



次に、旧旭村、子生にある通称「子生(こなじ)弁天」と呼ばれ、子宝や安産の御利益があるといわれる厳島神社を訪ねました。ここは広島の安芸の宮島の厳島神社から分霊を迎えたといわれています。



その後、元徳宿小学校の施設だった“徳宿の杜”により、梶山古墳群から出土した貴重な刀剣や勾玉、また、縄文から弥生時代の土器や土偶等の展示物を見学し、午後からは実際に現地に赴き、埋蔵されていた梶山古墳群や石室がある場所を見学しました。



さらに、古事記にも地名が残る白鳥の里を経て、旧大洋村役場近くの福泉寺を訪問しました。元国宝で現在は国指定の重要文化財となっている木造の釈迦如来立像(鎌倉時代末期に春日仏師が製作したといわれる)をご住職の解説とともに特別に御開帳していただき、間近で見学させていただきました。

帰りには俳句寺として有名な大儀寺にも立ち寄ることができ、渡辺講師の解説のもと、大変有意義な 1 日でした。

★第 3 回基本講座★ 2023 年 2 月 15 日

地域福祉プロモーターの鈴木宏治氏が IT の専門家としての視点と、障がいのある娘さんの子育てを通して学んだことを基本に、様々な視点からインターネットの活用術についてお話しくださいました。

1969 年にアメリカの国防総省が軍事利用のために開発した情報伝達技術がインターネットの始まりで、その後 1993 年には日本でも商用サービスが始まり、目覚ましい発展を遂げて生活が一変した経緯を振り返りました。スマホアプリを用いて健康管理に役立てる方法等も教えていただきました。



☆第 2 回特別講座☆ 2023 年 2 月 26 日

《県北地域の資源と目指すものを現地で探る》をテーマに公用バスで県北に向かいました。参加者 O. H さんのレポートにて行程を紹介します。

▼伊師浜海岸の海鵜捕獲場・鳥屋(とや)の見学

1300 年の歴史ある鵜飼文化を支える伝統の技。春と秋に断崖絶壁の場所に鳥屋を作り、その前におとりの鵜を数羽立たせ、野生の鵜が休むために飛来したところを鍵棒を使って捕獲します。この技術は日立市の無形民俗文化財になっており、市の収入源にもなっているそうです。

▼野口雨情生家訪問

雨情のお孫さんに対面し、東日本大震災の時には雨情自筆の掛け軸等の宝物を背負って避難されたなど生のお話をたくさん伺うことができました。「七つの子」「赤い靴」「シャボン玉」「雨ふりお月さん」等々の童謡は昭和育ちにはとてもすんなり懐かしく入ってきます。いつの世にも受け継がれてほしいです。

▼大津町五浦公園

近代美術の先駆者岡倉天心の家、六角堂を遠景で見ました。松と海、赤い屋形が海に映えキラキラ美しく輝いていました。天心が目指した新しい日本画の創造は、この五浦時代の 4 人の弟子の研鑽があったからこそと思われます。

▼高萩市で長久保赤水について学ぶ

佐川春久氏より、水戸藩の地理学者・長久保赤水が伊能忠敬より 42 年前に『改正日本輿地図』経・緯度線の書込みのある日本地図を完成させたとのこと。

全くその方の存在は知りませんでした。赤水の資料は重要文化財に指定され高校の児童・生徒も教材に生かされ環境問題防災対策にも活用されています。

赤水の学会では 813 人の会員がおり、郷土の宝赤水を全国に発信、町おこしに繋げようとしているそうです。

▼常陸国最古のお岩神社

日立市の常陸国最古のお岩神社 600 年の三本杉を見、短時間の森林浴を致しました。車窓からは日鉱の一本の長い煙突(現在は 1/3 の姿になっていた)を見られ、公害対策された証でした。

<おわりに>

この研修の目指したものは何!?と考えた時、ハッとまさに SDGs だとの気づきがありました。

茨城は、自然・歴史・文化・人・生物 etc…大変素晴らしい県だと思います。また、是非未知の世界・景色を見せて欲しいと共に自己研鑽に励もうと思いました。

ほこた塾の役員の皆様のご苦勞に心より感謝いたします。
(O. H)

★第4回基本講座★ 2023年3月15日

～子供達に見せよう大人の背中！色んな人がいる、色んな生き方がある～ と題して、学童保育とフリースクール自由の学校長で、一般社団法人ライツ代表の加藤正樹氏に講演をしていただきました。

加藤氏自身はアメリカで音楽活動を行い、帰国後には自転車と徒歩で四国八十八箇所のお遍路巡りをしたユニークな体験をお持ちです。国際行政書士でもあります。



30年前には67,000人弱だった小中学校の不登校者数が2021年には245,000人に増え、高校生も合わせると30万人にもなることや、2022年の小中高校生の自殺者が500人を越えている現状から、これまでの教育体制では対応できない児童生徒の居場所として「自由の学校」を設立されたそうです。

プロカメラマンの吉田ナギさんの講演会を企画するなど、子供達の為に精力的に活躍しておられることなど学びの多い講座でした。

★塾生の感想より★

第23回ほこた塾に参加して

私事ですが、3年前に退職して第2の職業に就いています。30年前は、銚田の大竹海岸でもハマグリやイシモチも沢山取れ、食卓を潤わしていました。職場でも仕事帰りにバス釣りや海釣りを楽しむ余暇の時間があり、子供会にも参加し、地域の皆さんとの交流が懐かしく思い出されます。現在では、地域の子供会もなくなり、空家も増え、地域コミュニティが成り立たなくなりました。残念ながら銚田市の将来に不安を感じざるを得ません。しかし、今回ほこた塾に参加して、活気のある年配の方に接し、少し安心した次第です。生涯学習の大切さを昔、親から聞いていましたが、これから、新しい知識や機械(スマホやPC)を導入しながら、残りの人生を謳歌したいと思っています。なお、ほこた塾で春休みや夏休みに地域の子どもたちも参加できる内容の講義を期待しています。その時は補助活動に務めますので。(銚田市西台 作田 敦)

* * *

ほこた塾に参加させていただき、いろいろな角度から茨城県を垣間見ることができました。茨城県の中でもいろいろな幸に恵まれた豊かな土地柄と、それに呼応すべく郷土愛に溢れた皆様と時間を共有できたことをありがたく思っております。まだまだいろいろ教えていただきたいことも多く、次回も参加させていただきたいと思います。私のいる八千代町も外国人の割合が高い町です。同じ社会問題を抱えているようにも思いましたので、オンライン参加が可能であれば、きっと八千代町の方々も参加されたいだろうと思いました。簡単ですが、お礼とごあいさつに代えさせていただきます。

(二エケ ひとみ)

仲間づくり部会

部会長 深作和則

2022 年度仲間づくり部会の事業として、婚活事業を 4 回開催しました。

昨年に引き続き新型コロナの感染防止に努めながら、水戸でミニ婚活を 3 回、土浦で 1 回開催し、水戸では開催ごとに 30 代、40 代、50 代と主な年齢層を変えることで幅広い年齢の方に参加していただきました。また、土浦開催では、地域でサイクリングの普及に力を入れているとのことで、レンタル自転車をお借りしてのサイクリング & ホテルディナー婚活を開催しました。2 月という寒い時期ではありましたが県南県西方面から多数参加頂き、霞ヶ浦湖畔サイクリングという今までと違った雰囲気で開催できたのかなと感じました。

2022 年度の延べ参加数は男性 42 名、女性参加者 36 名で 14 組のカップルが誕生し、参加賞、カップル賞には鉾田産のメロン、焼き芋、イチゴや地元のお店の商品などを使い、ご参加いただいた皆様にもたいへん好評でしたので、今後はそれらに併せて土浦サイクリングのような地域資源なども活用して開催し、多くの方々に出会いの場の提供と、素敵なお相手と巡り合ってもらえるよう更に工夫を重ねていきたいと思っています。



ホテルディナー会場



サイクリング婚活



水戸ミニ婚活会場

自然環境部会

部会長 大木繁夫

新型コロナウイルス感染症のパンデミックも 3 年が経過し、ウイルスは変異を繰り返し、感染力は高いものの弱毒化し、ようやく終息にたどり着きました。2022 年度は、2020-2021 年度と異なり自然環境部会の活動を中断する必要もなく、北浦北部を中心に春夏秋冬の野鳥や植物の観察を行う定例の自然観察会を 16 回、北浦湖岸の清掃活動を 4 回実施することができました。3 年もの間、鉾田市のバスを用いた移動研修を自粛してきましたが、次年度からは再開していけるものと思います。

北浦北部のカムリカイツブリについては、例年より早く営巣活動が見られ無事に 3 羽の雛が誕生し、2018 年以来 4 年ぶりに成鳥まで育ちました。希少種の繁殖の継続に胸を撫でおろしました(巻頭写真参照)。

昨年、安塚公園脇の芦原にあったヨシゴイ【準絶滅危惧】のサブコロニーが忽然と姿を消してしまいましたが、北浦北部周辺に散在して繁殖しているようです。いつでもベストポジションで見られた観察場所を失ったことは大変残念ですが、これからも彼らを見守っていききたいと思います。

2023 年 2 月 18 日から 3 月初めにかけて、北浦北部に珍客が訪れました。コウノトリ【絶滅危惧 IA 類】の番いす。野田で放鳥されたものと考えられます。コウノトリの来訪は、北浦北部が自然の残る貴重な場所であることを示していると言えましょう。しかし、住み着いて繁殖するにはもう少しという所でしょうか。コウノトリに気に入ってもらえる豊かな自然環境を実現できるよう、頑張りたいです。



一生懸命に擬態するヨシゴイの幼鳥

北浦堤防を散歩中にヨシゴイの幼鳥を見つけました。近づくとヨシに擬態するのですが、草原では意味がありませんね。(撮影 小沼勲 2022年9月13日 於北浦北部)



北浦北部を訪れたコウノトリの番い

識別用の足環をつけていました。千葉県野田市のコウノトリ飼育施設「こうのとりの里」から放鳥されたものと考えられます。(撮影 大木繁夫 2023年2月23日)

活動のハイライト

① 生態系を守れ！ 特定外来生物の駆除活動

4年目となる特定外来生物駆除は規模を大幅に拡大し、オオキンケイギク(5月22日)、オオフサモ(6月12日)、アレチウリ(9月11日)の駆除を3回にわたり実施しました。5月22日の活動は5月26日の茨城新聞で報道され、さらにYahoo!Japanニュースにも取り上げられ、予想以上の反響がありました。メディアの影響力は大きいですね。まだまだ故意ではないにせよ、育ていらっしやるようなお宅や公的施設が散見されますので、以下を再掲。『特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律』によると、販売・頒布目的での飼養などに対して、個人には3年以下の懲役や300万円以下の罰金、法人には1億円以下の罰金が科されるとあります。販売・頒布以外の目的での飼養などであっても、個人には1年以下の懲役や100万円以下の罰金、法人には5,000万円以下の罰金が科されます。多くの方々に知っていただき、クリーン作戦で空き缶を拾うような感じで駆除できるようになれば良いと思います。



② 銚田一高附属中学校第一学年 自然観察&歴史探訪 (2022年10月14日)

前回2021年度に引き続き、銚田一高附属中学校第一学年(40名)の皆さんと自然観察&歴史探訪を実施しました。前は自然観察のみの半日開催でしたが、



今回は歴史探訪が加わり一日がかりのイベントにパワーアップしました。自然環境部会は前回同様、自然観察におけるフィールドワークを担当。生徒の皆さんに北浦北部の貴重な自然環境について理解を深めていただけたと思います。この様子は 10 月 21 日の茨城新聞に掲載されました。

③ 第1回秋の星空観測会（2022 年 10 月 29 日）

2022 年度は新たな自然学習の取り組みである天体観測にもチャレンジしました。10 月 29 日に青少年育成鉾田市民会議串挽地区が主催した「第1回 秋の星空観測会」に講師及び助手として 6 名の部会員が参加、鉾田南小学校の小学生約 30 名及び保護者の皆さんと、月のクレーター、木星の縞模様と 4 大衛星、土星の環などを天体望遠鏡で観測しました。このイベントは、11 月 7 日の茨城新聞に取り上げていただいています。



④ 北浦北部に「かすみ網」、カワセミ姿消す

12 月 11 日の自然観察会において我々のメンバーが、北浦湖岸の芦原養生地に仕掛けられた網のようなものを発見し、川又さんに通報しました。その結果、これは何者かによって違法に仕掛けられた「かすみ網」であることが分かりました。残念なことに、撤去する前にカワセミが引っ掛かって犠牲となってしまいました。現場周辺はカワセミの頻出スポットでしたが、この一件以来、カワセミの姿を見ることが出来なくなりました。カワセミがまた戻って来てくれることを願ってやみません。



現場周辺で撮影したありし日のカワセミ
(撮影 大木繁夫 2022 年 11 月 19 日)

今後も自然環境部会では環境の保全活動、環境の保全活動を促進するための調査研究や啓発活動を行っています。一緒に活動していただけるメンバーを募集していますので、是非お気軽にお声がけ下さい。本部会の活動は、公益信託「エコーいばらき」環境保全基金の援助の下で実施しております。同基金で購入したフィールドスコープ、双眼鏡、スタッフジャンパー他数々の物品が活躍しております。ここに感謝の意を表します。

編集後記

この度、節目の IPPO20 号の発刊となりました。例年にも増して、充実した内容となっていると思います。特に人材育成部会のほこた塾事業においては、塾生からの寄稿もあり、ほこた塾に強い関心を持つファンが、市内外問わず多く見られるようになりました。

32 年前に生涯推進本部(行政組織)と推進会議(民間組織)が発足し、教育委員会に事務局が置かれ、以来、生涯学習推進会議と名称を変更し、事務局も企画課に移り小学校区単位で活動が行われるようになりました。そして、更に 25 年前に鉾田市まちづくり推進会議と名称が変わり現在に至っています。

その間、時代の変遷とともに、消えた事業、残った事業とありますが、今日まで続けられたのも、活動に参加された皆様と仕事を持ちながら、夜遅くまで会合を重ねてこられた運営委員他、会員の皆様のお陰と感謝しております。

第 23 期ほこた塾のテーマでもあります、「嗚呼、30 年前」を振り返るとき、この IPPO20 号が、読者の皆様の明日からの希望の一步となりましたら、幸いに存じます。

(運営委員長 田口裕之)